

小児泌尿器科

1. スタッフ（平成27年4月1日現在）

科長（教授） 中井 秀郎
 医員（助教） 川合 志奈
 医員（病院講師） 中村 繁
 医員（病院助教） 日向 泰樹

2. 診療科の特徴

1) 当院小児泌尿器科の特徴

小児泌尿器科学は比較的新しい専門診療領域で、米国では2006年にboardが確立された。我が国全般では、泌尿器科医の一部と小児外科医の一部が、診療実務を担当している。当科スタッフは、成人を含む泌尿器科学の全般を修めた医師により構成され、泌尿生殖器の発生・機能・解剖への習熟が強みである。同時に、子ども医療センター専属医師として、成長発達過程への理解、両親への配慮などの十分な訓練を積んでいる。近年の小児医療全般の問題として、transition（慢性疾患の成人期移行医療）が取り上げられているが、大学病院との相互乗り入れが可能な当科は、その領域においても先駆的な医療を提供している。

わが国の大学病院における唯一の小児専門の泌尿器診療科であるため、当該診療・研究に関する指導力を国内外に発揮することも任務である。2013年7月、東京での第22回日本小児泌尿器科学会に引き続き、2014年11月、世界遺産日光の社寺を会場に16回アジア太平洋小児泌尿器科学会を開催した。

2) 整備状況

外来は週3日で診療枠数は適正であるが、外来看護スタッフの小児泌尿器看護の専門性をさらに向上させる必要がある。病棟枠現状4床は適正である。手術枠は週1.75日で最近は適正である。入院待機患者は約22名。

積極的な病病連携により、紹介元をみても診療圏は北関東のみならず、首都圏、東北各県に広がっている。外来診療は、慢性疾患の管理や難治性尿失禁の診療、在宅自己導尿管理などの比重が増加し、外来ケア（看護）ケアパシエの増大が喫緊の課題である。

近年、小児専門性の発展のためには、関連領域の技術革新を導入する必要があり、とくにロボット手術や内視鏡手術を筆頭とする低侵襲化技術を習得すべく、大学病院泌尿器科・腎臓外科との人的連携強化を図っている。成人系泌尿器科との連携は、小児医療が直面するtransition（移行医療あるいは成育医療）の問題解決とも整合性がある。小児の専門独立性が担保され、成人泌尿器科とシームレスな診療・教育体制が整備されている点

こそが当学の特長であり、この点をさらに磨き整備を進めることが重要と考えられる。

3) 当科対象疾患のあらまし

対象疾患の三つの柱は、乳幼児、小児の①腎・上部尿路疾患、②性腺生殖器疾患、③排泄障害、である。先天性疾患が多い。また小児疾患の成人症例は子ども医療センター外来を受診し、大学病院病棟に入院、子ども医療センターにて手術を行っている。①は、有熱性尿路感染症や胎児超音波検査を契機とすることが多く、②は、出生直後から気づかれる男女外陰奇形、③は、神経因性膀胱や難治性夜尿症・尿失禁が多い。

全身性多発性奇形の一部症としての泌尿器奇形も多く認め、関連各科とのチーム診療が不可欠である。他院での治療困難例、中断例に治療を追加し完了させる任務もしばしばである。

3. 診療実績

1) 新来患者数	283人
再来患者数	3,982人
紹介率	90.1%

2) 入院患者数

196人

3) 手術実績

全手術症例数	186例
全手術件数	209件

3-1) 手術症例病名別件数

先天性水腎症	10
膀胱尿管逆流症	16
停留精巣	68
尿道下裂	22
先天性尿道狭窄	10
陰嚢水腫	8

3-2) 術式（合併症）

腎盂形成術	4
腎摘除術	3
膀胱尿管新吻合術	14
内視鏡的逆流防止術	3
精巣固定術	68
尿道下裂形成術	18
女児外陰形成術	4
内視鏡尿道切開術	10
尿失禁手術	

膀胱頸部形成術	2
膀胱頸部注入療法	4
腸管利用膀胱拡大術	4
腹壁導尿路作成術	1
腹腔鏡手術	18

4) 主な処置・検査

排尿時膀胱尿道造影、排尿機能検査（ウロダイナミクス）、膀胱尿道内視鏡検査、上部尿路機能検査、ラジオアイソトープ検査、超音波検査

5) カンファレンス

抄読会（月曜）

外来患者・手術患者カンファレンス（火曜）

小児画像カンファレンス（火曜）

二分脊椎カンファレンス（月1回月曜）

栃木小児泌尿器科症例カンファレンス（TPUCC）
（不定期）

4. 事業計画・来年の目標等

1) 重点診療疾患

診療が十分体系化されていない分野に今後も積極的に関わっていききたい。

第一に、難治性尿失禁の内視鏡治療、再発性乳幼児尿路感染症の治療、小児尿禁制手術（とくに膀胱頸部形成術）下部尿路生殖器奇形の形成手術（とくに会陰型尿道下裂の一次的形成術、膀胱外反、総排泄腔外反）を確立する。

第二に水腎症、上部尿路奇形、尿失禁に対する低侵襲手術（ロボットを含む）を早期確立する。

第三に性分化疾患に対する外科系専門診療科として、国内随一の実績を積む。

2) チーム診療における目的意識の共有

- ①腎機能障害、腎盂腎炎などの精査治療に関して、小児科（腎臓）や小児画像診断部との定期的カンファレンスを継続。
- ②性分化疾患において、性別不明外性器に対しては社会心理的緊急疾患として、新生児科、小児科（内分泌代謝）と連携診療し、思春期青年期症例に対しては、婦人科との連携診療を強化。
- ③排泄（排尿・排便）管理において、小児外科、看護師との連携チームを円滑に機能させる。（小児排泄管理学の概念の拡充）
- ④二分脊椎専門外来において、小児脳神経外科、小児整形外科、小児外科、リハビリテーション技師、看護師などと、外来診療時間を同一日に調整し患者利便性を図るとともに、診療効率を増加させる。

3) 臨床的医学研究

- ・臨床研究「保存的治療抵抗性尿失禁男児における先天性尿道閉塞性病変に関する研究」（担当：中村講師）
- ・臨床研究「保存的治療抵抗性尿路感染症または尿失禁症の女児における先天性尿道閉塞性病変に関する研究」（担当：中村講師）
- ・臨床研究（B12-74号）「小児の過活動膀胱患者に対する抗コリン剤の安全性と有効性の検討」（担当：川合助教）
- ・臨床研究（A14-058号）「小児有熱性尿路感染発症症例の臨床的検討」（担当：川合助教）
- ・臨床研究（A14-056号）「停留精巣症例の臨床的検討」（担当：日向助教）

4) 治験（計画書番号A0221047）「神経学的疾患に伴う排尿筋過活動の症状を有する、6歳から16歳、体重25kgを超える患者に対するフェソテロジンの安全性および有効性」

5) 厚労省科学研究費（分担研究）2件

- ・「腎・泌尿器系の希少・難治性疾患群に関する診断基準診療ガイドラインの確立」（飯島班）
- ・「性分化疾患の実態把握と病態解明」（緒方班）